

令和3年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

	視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月11日実施)	総合評価 (3月25日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導 ※ JSL=Japanese as a second language	①確かな学力の定着および学習習慣の確立に向けた取組を行う。 ②自己肯定感とコミュニケーション力の向上を目指し、一層の授業改善をすすめる。 ③個々の能力・状況に応じた学習支援体制を整える。 ④日本語を母語としない(JSL※)生徒に対しても確かな学力の保証をはかる。	①生徒の主体性を引き出す授業を実践し、生徒が「わかる」「学力がついた」と実感できるようにする。 ③生徒の状況に応じた個別支援体制を整える。	①生徒が主体的に取り組めるよう授業研究・授業改善を進め、確かな学力の定着とともに達成感を得られるようにする。 ③個々の生徒の状況に応じて補習や学習支援などが行えるよう、環境整備に努める。	①生徒による授業評価の項目4「授業の中で身に付いたことや、できるようになったことを実感することができた。」において、評価4,3の計が90%を越えるか。 ③昼休みや放課後の時間確保ができたか。教室や職員室前スペースなどの学習環境整備ができたか。	①生徒による授業評価の項目5(番号変更)について2回の平均は、1年生83%、2年生84%、3年生85%であった。目標には達していないが、前年とほぼ同じか微減であった。 ③職員室前スペースは、コロナウィルス感染予防の観点からしばらく利用を制限されていた。10月以降、新しいパーテーションが設置され、安全に安心して学習できる環境が整い、学習や進路指導などで活用されている。	①1学期はコロナ対応で臨時休業もあり、落ち着いて学習することが困難であった。分散登校期間はオンラインによる授業が行われ、ICTによる教材や課題の設定などに多くの工夫が見られた。10月以降通常の授業に戻ってからも、生徒が関心をもって取り組めるよう授業の工夫は継続されており、2回目の調査では僅かだが増加している。 ③生徒対応のための昼休みや放課後の時間確保については、工夫が必要である。	○生徒による授業評価の目標(満足度90%)が高くて素晴らしいと思う。 ○i-Unitは、学び直しという視点では高い評価に値する。個々のニーズに応じたもっと高い学習意欲をもった生徒への支援も必要。 ○魅力ある授業づくりのために、先生同士(ベテランから若手へ等)で教えあえると良い。 ○スタディアプリの導入は魅力的なことである。	①確かな学力の定着という観点から、生徒は一定の達成感を得ながら学習に取り組んでいると考えられる。 分散登校期間中のオンライン授業の実施により、ICTを活用した授業展開や教材作成などに多くの工夫が見られた。今後は、新たな工夫の有効性などを精査し、より良い授業作りに生かしたい。 ③学習環境の整備は徐々にではあるが進んでいる。職員室前スペースもパーテーションが設置され、以前のように学習指導等の場として活用されている。今後は物理面よりも、生徒と接する時間の確保などソフト面の改善が必要である。	①新1年生より授業用端末を全員購入することにより、ICTを活用した授業の充実が必要となる。i-Unitの授業では新たに学習ソフトを導入するので、有効な活用方法や適切な評価方法の構築を進める必要がある。 ③補習や学習支援などを行うための環境整備のうち教員の時間確保については、会議や授業持ち時間の削減など学校全体で検討する必要がある。
2	(幼児・児童・)生徒指導・支援	①地域の中の学校として地域とともに規範意識の向上を図り、リーダーシップを育成する事でコミュニケーション能力の向上をめざす。 ②個別支援を積極的に推進し個々に応じた指導を行う。 ③中学校との連携や交流を生かし、部活動・学校行事の活性化を図る。 ④生徒の主体的な学校行事への取組を推進する。その活動を通して自己肯定感の醸成とコミュニケーション力の向上を図る。	①規範意識の醸成と問題行動の未然防止に努め、地域貢献できる人材を育成する。 ②不登校等学校生活に馴染めない生徒に対し全職員で組織的に対応する。 ③授業や生徒会活動、部活動において中学校との交流の機会を増やす。	①地域と積極的に関わり規範意識の向上を様々な場面で学べるような場を作り出していききたい。 ②学校生活に馴染めない生徒を早めに見つけ出し関わる事で不登校の出現率を押さえたい。 ③部活動においては、中学校との合同練習会や講習会等の実施を推進する。また、ワーキンググループ等を通して中学校との生徒会役員の交流を図る。	①学校から外に出て学ぶ場面を多く作り出すことが出来たか。 ②不登校の出現率を5%以内におさえる事ができたか。 ③中高交流活動が多く交流ができたか。また、生徒会活動に新たな取り組みのきっかけになる機会になったか。	①コロナ禍の状況の中で地域と積極的にかかわる場を構築することに努めた。 ②ミーティングを通して情報の共有と課題を見つけ出すことができた。不登校生徒に関しては様々な要因があり、出現率を押さえることに時間を要した。 ③コロナ禍で中高交流活動が思うようにできなかった。10月より感染状況が収まりつつあり、ワーキングGを通して部活動の中高交流活動を計画し実施した。	①時間をかけて取り組む姿勢を持ち続ける事を大事にしていきたい。 ②不登校生徒への学年での情報共有を徹底し役割分担を決めてアプローチをする事を継続していきたい。また登校できるようになった生徒に目を向ける時間の確保を目指していきたい。 ③生徒会活動を活性化し、状況を見ながらさらに中高交流活動を広げていきたい。	○中学校との交流は良い取組で今後も継続してほしい。 ○様々な取組において、先生中心ではなく生徒にまかせてみるのも良い。 ○住民からの苦情が多いというのは、地域が関心をもって見ているということ。その後の対応が大切である。	①地域よりの様々な声かけに対して素直に聞ける態度を育成することができるようになってきている。引き続き積極的な声かけによる規範意識の向上につなげていきたい。 ②不登校生徒に対して以前より早く情報を収集し対応策を検討できるようになっている。再度不登校状態になるなど繰り返しの状態になることもあるので継続して対応を進める事が今後の課題といえる。 ③コロナ禍で十分な成果を上げることができなかったが、次年度につながる交流活動を実施することができた。この活動が一部の部活動に留まらず、学校間全体で組織的に実施されていくことが今後の課題である。	①素直に聞く事ができるように規範意識を高めていきたい。それに伴い地域や保護者とのかわりを積極的に持ち続けていきそれが自然な姿であることを意識させる事でコミュニケーション力を高めていきたい。 ②不登校の状況を一気に改善するのではなく繰り返しの中で登校を目指すように時間をかけて指導をすすめていく。 ③中高の生徒会本部の交流や各部活動の顧問の交流会等を計画的に実施するなど組織的な方策が必要となる。

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月11日実施)	総合評価(3月25日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3 進路指導・支援	①総合的な探究の時間の活用を含む地域と連携した取組を用いながら、生徒の3年間を見通した指導により、自分の価値観を見つめ、関心分野を広げ深めた上で、主体的に希望する進路指導を実現する。	①総合的な探究の時間の活用を中心としたキャリア教育の推進により将来を見据えた進路選択が可能となる進路指導体制を確立し、保護者を含めた生徒のための進路支援体制を構築する。	①総合的な探究の時間の活用を組織的に、かつ継続的なものとして構築する。探究活動や成果発表などの探究の手法を進路決定に活用する。また、保護者向け説明会など保護者の進路意識を高める働きかけを行い、生徒とともに進路活動を進める体制を構築する。	①生徒が自ら目標を設定し、挑戦できたか。 ・総合的な探究の時間を活用できたか。 ・生徒の進路希望の達成率85%以上の達成をしたか。 ・教員研修により進路指導スキルが向上したか。 ・保護者向けの進路行事を構築できたか。	・総合的な探究の時間は、コロナ禍で予定より遅れてはいたが1年2年ともに職業研究、分野別研究を取り入れた取組を推進できた。 ・職員へは専門学校の良し悪しを含めた研修を行い、生徒への進路指導の一助とした。 ・今年度は全学年の保護者向けに進路決定・受験費用の意識を高めるきっかけの説明会を行えた。 ・3学年は概ね希望の進路を達成でき、目標の85%を達成した。(87.4%見込)	・探究の取り組みとして大学との連携事業を進めているが、参加生徒の数の増加を図る。 ・保護者向けの進路説明会は資金の説明を早い時期に出来てきているが、全体周知が今後の課題である。 ・3学年の進路指導は就職がコロナ禍の影響で企業の募集に偏りがあるので、今後の動向を見極めて適切な進路指導に努める。進学は指定校を中心に希望を達成しているが、一般受験への挑戦も促す。	○中間層の生徒のフォローも必要。 ○地域に根差す取り組みは重要であるが、幅広く情報提供をして、進路選択の幅を広げて欲しい。 ○専門学校の良し悪しを含めた研修は確かな情報と知見に基づき教職員自らが企画運営する説明会となったのではないか。また、それにより生徒の進路選択に有効であったのではないか。○進路指導室が整然としており、生徒の活用の活性化につなげて欲しい。	・探究は一部の生徒ではあるものの外部での発表も経験でき、高評価をいただいた。大学との連携も遂行でき活動が活発化している。これをより多くの生徒の参加につなげるよう工夫が必要である。 ・保護者向け説明会も内容が定着し、職員の意識も何が必要であるか理解して取り組めた。これもより広い周知が保護者に必要だと考える。 ・生徒の進路実現に対する取組は概ね良好であるが、一部説教的に取り組まない生徒への対応が課題である。	・探究の筋道は立ってきているので、より多くの生徒に早くから周知し、内容を理解させて、取組を強化させる。 ・大学との連携は交通手段が難しい生徒もいるので、オンラインも含めて連携しやすい手段を構築する。 ・生徒の進路に対する保護者の理解は説明会だけでなく、1年生から保護者との機会が生じるたびに啓発できるとよい。 ・生徒の進路希望85%は概ねここ数年達成できてきているが、これより上昇させるには根本的に生活のリズム、保護者の意識から構築する必要がある、学年、生活指導グループなど幅広い横の連携が必要だと考える。
4 地域等との協働	①学校運営協議会を中心に地域との協働を目指す。また、地域・学校協働本部との連携を円滑にし、学校外の学修を推進する。	①中高連携の活動を活性化させるとともに、地域・学校協働本部(明日楓会)との連携を密にし、生徒が主体的に活動できるように組織的に対応する。	①地域・学校協働本部(明日楓会)と連携し、学校と地域との交流に重点を置いた活動を展開し、連携生を中心としたボランティア活動やインターンシップの推進を図る。	①生徒がボランティア活動やインターンシップに興味を持ち、地域・学校協働本部と連携して生徒の支援を円滑にできたか。 ・コロナ禍で地域の防災活動には参加できなかった。	①地域課題解決サークルが組織化され、活動が活発化した。しかし、コロナ禍のため、学校外の活動はなかなか進まなかった。 ・状況を見ながら地域防災活動にも以前のように参加したい。	○地域学校協働事業(明日楓会)の取組は大変だとは思いますが、とても意義のあることである。ここが踏ん張りどころではないか。	①コロナ禍ではあったが、学校外の学修は、卒業生全員が履修・修得をした。その反面、2年生の活動は制限され、多くの生徒が未だ修得をしていない。全員の修得を目指した綿密な改革が求められる。 また、ボランティア活動やインターンシップの本来の目的を再確認し、連携生を中心に活動を展開し、生徒の自己肯定感の醸成につなげたい。	①学校外の学修に関しては、学級担任が常に状況を把握し、学年担当が地域学校協働本部等と連携しながら進める必要がある。 また、ボランティア活動やインターンシップの個々の取組の活性化のために、連携生の組織的な地域交流活動や中高連携活動を充実させていく必要がある。	
5 学校管理 学校運営	①「学び続ける教師、変化に対応できる教師」を目指し、事故のない安全安心な学校運営の推進をはかる。 ②地域との連携を深めながら、生徒にとって安全安心な学校環境を構築する。	①不祥事防止において未然防止の意識啓発をし、安全安心な学校運営を目指す。 ②地域防災を念頭に地域との連携を深め、生徒・職員に対する防災研修を充実させる。	①定期的な不祥事防止会議を開催するとともに、事故不祥事を他人事にならない雰囲気をつくる。 ②FGC員を中心に地域と連携した防火防災活動を行う。	①不祥事防止会議の講師を多くの職員に体験させることはできたか。 ②防火防災活動が実施できたか。多くの生徒・職員が参加できたか。	①毎月行われている職員会議において不祥事防止会議を開催し、多くの職員がかかわることで不祥事を他人事にならない雰囲気となっている。 ②コロナ禍の状況で模索しながら、可能な限り通常の消火訓練・DIG訓練が実施できた。	○先生方のメンタルの部分が気になる。若い先生が増えてきたのでお互いにコミュニケーションがとれる雰囲気が大事。校長先生を中心にすすめていただきたい。	①不祥事の未然防止のために行っている不祥事防止会議は、他人事にしないことをも目的に多くの職員が講師となるような仕組みを構築したが、慣れからか形骸化してきた感がある。 ②ファイヤーガードクラブ活動を始めとして、従来年4回の防災研修は実施できた。従来行われた地域と連携した活動を可能な限り実施すると同時に、様々な災害を想定した訓練を行う。	①不祥事の未然防止に向けて、不祥事防止会議の在り方を検討し、新たな取組が必要である。 ②自治体や地域との連携・協力をさらに進め、災害時に的確な対応ができる体制づくり・活動・訓練を推進する。	